

# 日本基督教団 東中国教区ニュース

## NEWS

東中国教区  
教区ニュース誌委員会  
〒七〇〇〇八  
倉敷市鶴形一五五  
倉敷キリスト会館内  
TEL 〇八六四二一七七八〇

### 説教「つつこと、天に宝を」

旭東教会

牧師 森 言一郎



旭東教会にて 森 牧師

尽きることのない富を天に積みなさい。  
そこは、盗人も近寄らず、虫も食い荒らさない。あなたがたの富のあるところに、あなたがたの心もあるのだ。  
(ルカによる福音書12章33節〜34節)

**5** 0年近く前の小学生の頃、月に500円の小遣いを何ヶ月か貯め、福田商店という小さな駄菓子屋さんの片隅にあるプラモデルを買いに行くのが楽しみでした。福田のおばちゃんのおつい視線を感じながら、畳の上に30分は座り込んでいたものです。

\*

**と** ころが、振り返ってみると、組み立てたプラモデルをたいせつにしていた記憶はほとんどありません。どうやら、楽しかったのは、小遣いを貯め、それをぎゅっと握りしめてプラモデル選びをしている時までだったのです。その頃のわたしが得ていた幸せは、泡のようにやがて消えてしまうものでした。

\*

**イ** エスさまは、「小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる」というお言葉を語られた直後に、消えることのない財を積む人生について語られます。それは、わたし流に言い換えるならば、あなたのこれからの人生に、絶対的な安心感を感じられる、心の中の財産を作るような生き方をたいせつにしないか、ということだと思ふのです。

\*

**こ** れからの人生の長短にかかわらず、目には見えないけれど、確かに天に富を積み生き方と

説教「つつこと、天に宝を」	1
第一回宣教会議報告 その一	2
第一回宣教会議報告 その二	3
東中国教区での実習を通して、夏期伝道実習に参加して	4
シニアハウス「やすらぎの泉」六周年記念コンサートと感謝会	5
総社教会より「一緒に喜んで下さい」	6
教会紹介 玉島教会	7
最後部 「こんにちば」のお部屋・編集後記	8

いうものは、いったいどのようにして形作っているのでしょうか。荒波が押しよせようとも、相当な回り道をしなければならぬ時でも、「だいじょうぶ、大丈夫」とうなずける安心感。そして、今の歩みが続ければ、天に宝を積みことになるのだ、という自己肯定感を伴う確信が持てるならば、こんな幸せなことはありません。

\*

**そ** んなことを考えながら、わたしはふと思いました。わたしたちの生き方の順序についてです。まずは宝を頂いて確保し、少し余裕が生まれてから天に宝を積みもうとしているのではないか。でもその順番、イエスさまが考えておられるのは逆かも知れないぞと。使徒言行録20章35節に「主イエス御自身が『受けるよりは与える方が幸いである』と言われた」とあります。このお言葉、頭の中ではわかっているつもりでも、果たしてどれほど、日々の暮らしの中で実践しているだろうかと心配になります。

\*

筋の道が見えて来ました。どうやらわたしたち、福音を誰かに届けようとする（「伝道」とも言います）、その途上においてこそ、天に宝を積み生き方を始めているのではないか。この気付きを与えられたのですから、こつこつと、楽しみながら、教区のみんなで伝道に励みたい。そう願うのです。

# 二〇一七年度 第一回宣教会議

## 第一回宣教会議報告 その一 「主に仕える 希望の道を求めて」

教区総会副議長 服部 修  
(番山町教会)



服部副議長

二〇一七年九月四日、上井教会を会場にして今年度の第一回宣教会議が開催された。

今回の宣教会議の主な課題は、教区の宣教強化についてであり、この内容に沿って中井大介師、柴田彰師の発題、および、今後の教区負担金の展望を踏まえて濱上進さんに発題をいただいた。今回は、特に話題となった前半の二人の先生の発題と、それに伴う議論に集中して報告をさせていただきたいと思う。

最初に中井師より「教会強化特別資金運用規定における『宣教強化』のとらえなおし」と題しての発題があった。

東中国教区は小さな教区でありつつ、これまでいわゆる謝儀援助、また互助制度を設けずに歩んできた背景がある。この実情と「宣教強化」ということがどのようにリンクするのにかについては、本来東中国教区の「宣教基本方策」との関わりも出てくる。そこで発題のポイントとして挙げられたのは、林比佐雄師がまとめた文書の分析である。すなわち①東中国教区は、教区として小規模教区である。②「小規模教会」を相当数含む教区である。③教師は低い謝儀による生活を余儀なくされている。④「教会強化費」は実質的に教師謝儀援助として運用されている。⑤当教区の教会は「通過教区」と呼ばれ、牧師が結婚したり正教師になると他教区へ転任するケースが多く、伝道が停滞気味である。⑥教区の伝道にとって大切なのは、牧師が教会に強く長く定着することであり、そのための牧師謝儀保証制度を確立することである。

この分析に基づいて、中井師はいわゆる林文書に示されている「宣教強化」の意義をとらえなおし、これまでの原則にとらわれない「宣教強化」ということを考えるべきときが来ているのではないかと語った。この指摘の背景にあるのは、近年「教会強化特別資金」での「教会強化費」の増額傾向の事実である。実際、伝道資金制度発足以降、申請教会は増加し、総額も増加している。以前より繰り返し指摘されてきたように、このままでは「教会強化地区別資金」は枯渇して行くことが明らかである。だからこそ、「宣教強化」の新しい定義づけが必要ではないか、と指摘された。

柴田師の発題では、「宣教強化」の具体的な内容まで提案があった。とりわけ、「東中国教

区の宣教強化のために必要なこと」の項目では、徹底した機構改革ということが述べられ、そこでは「地区の再編」「教区の機構改革」「教区内予算における、『教区内の宣教強化』の予算を確保する」「主を礼拝する群れが協働する教区」といったことが語られた。

以上の発題をもとに活発な議論が行われた。やはり話題の中心になったことはこれまでの「宣教強化」の意識をどのように改革して行くか、その新しい「宣教強化」とはどういうものであるのか、そのために具体的にどのような行動することができるのか、ということであった。話題となったことをいくつかのポイントに分けるならば、一つは、「教会強化費」が実質的に「牧師謝儀援助」として運用されていることに対し、「牧師の生活を支える」のではなく、「牧師の活動を支える」ための資金とするべきではないか、ということ。二つは、「一教会一牧師」は基本的に願うところではあるが、実質的に「一牧師」を招聘できるだけの会計規模を持たない教会が東中国教区には多いのだから、「一教会一牧師」に固執するのではなく、「協働」の理解のもとで、「複数教師による複数教会の牧会」も積極的に考えられるのではないかと、ということ。三つは、「協働」を支えるための地区の再編および教区の機構改革(常置委員や委員会の人員数の再検討など)、である。

いずれもが大きな課題である。けれども、現状のままではただ衰退するのを待つほかに状況が目前に迫っていることも宣教会議の中では話し合われ、これまで繰り返し返されてきた議論から一歩進めるべきではないか、との意見も

多く見られた。言い換えればそれほどそれぞれの教会の危機意識が高いということのあらわれであると言えるかもしれない。もちろんそれまで与えられた地で活動を継続してきた教会の実情を踏まえた場合、属する教会員の心情が無視して議論を進めて行くわけにはいかないが、だからといって現状を維持しているのでは「宣教強化」が空文化してしまう状況が目前にある。私たちは福音をのべ伝えるためにたてられているのだ、という事実を踏まえるならば、いかにしてそれぞれの教会の礼拝を維持することが大事であるのかを考える必要がある。そこに教会があり、そこで礼拝がいつも守られているということこそが、本当の意味での「宣教強化」であるだろうし、その礼拝を守るためにこそ資金は適切に運用されなければならぬ、といったことが話し合われた。

今回話題となったことは、教区内教会との密接な話し合いが、当然のことながら必要になる。同じ地域にあつて主に仕えて行く希望を様々な形で確認し合えたら、と思わされる宣教会議であった。



上井教会にて 宣教会議

## 第一回宣教会議報告 その二 「教区負担金 それは伝道」

財務部委員長 濱上 進  
(倉敷水島教会)



濱上委員長

先般、教区の宣教会議において教区負担金に関して、現在の教区財政の状況を踏まえて二〇一八年度以降の展開について発題させて頂きました。

現在負担金は教区経常会計収入の繰越金を除くほぼ全額に当たります。そのうち九三%が教区組織を維持、運営するための経費、すなわち会議費、関連団体(教団を含む)への分担金、事務費(含む人件費)、などに使われます。これは教区という組織を持つ以上必要な経費ですが、強ちに節減努力を怠ってはなりません。

一方、各教会・伝道所が直接参加できる事業によって還元される費用は、残りの七%程度(約一〇〇万円)に過ぎないのです。宣教活動は、個々の教会・伝道所の特色を生かしつつ隣りの同胞と連携しながら展開することを旨として、各地区を通じて助成金としてこれを配

分しています。他方三年目を迎えた教団の伝道資金制度から、教会強化資金として用いる二九〇万円と伝道活動支援に用いる二二〇万円の交付を受けています。これを各教会の活性化、礼拝の群れの維持に活かさなければなりません。教区自身の負担金から支出するよりも伝道資金の交付金の方が多いという悩ましい現実に向き合うかも課題です。一方、負担金の集め方については、教会・伝道所の教勢が伸び悩み状況を踏まえ、諸経費の節減方策と並行して一〇年間で一八%の削減を果たしてきました。同時に公平さを求める声にこたえて賦課算定方式も改善してきました。教区内全教会の経常支出総額の凡そ六%強を負担金予算として目論み、これを教会・伝道所の規模に応じて分担して頂く方式にしています。先ず予算の三五%を現任陪餐会員数に応じて配分し(一人一律二五〇〇円/年)、残り六五%を各教会の経常支出額に応じて負担をお願いしています。いずれも急激な変動を避けるため過去三年間の平均値を基準にしています。経常支出額からは必要経費的な支出の一部を控除しています。さらに全教会の負担金が前年度負担金より増額とならないよう上限調整をしてきました。しかし、このまま教区財政を切り下げていくだけでは、教会・伝道所を活性化できないため、負担金の増加に転じる事態も遠からずあり、前年度より負担が増えることを認識しておく必要があると思われまます。これについて、宣教会議では上限五%程度の増加シミュレーション結果を示して理解を求めました。皆さんの反応は、伝道資金の有効な活用を含め教区内の教会・伝道所を活性化する方策に寄与するのであれば理解できるとの感触でした。

## 二〇一七年度 東中国教区 岡山県中部地区 東中国教区での実習を通して



同志社大学神学部  
神学科四年生

前田 望

### 実習期間

(二〇一五年七月三〇日から九月一三日)

二〇一七年七月二七日から八月一〇日

二〇一七年九月二五日から一〇月一〇日(一五日)

### 実習内容

- ・説教奉仕・礼拝参加(倉敷水島教会、総社教会、岡山教会、天城教会、倉敷教会)
- ・倉敷イムズカフェでの奉仕
- ・諸教会への訪問(高梁教会、倉吉教会)
- ・山陰ファミリーキャンプへの参加(二泊三日)
- ・光明園祈禱会への参加
- ・信仰入門講座への参加

夏期伝道実習生として東中国教区に派遣していただいた前田望です。これまでの実習内容としては、主日礼拝での説教奉仕(倉敷水島教会、総社教会)、諸教会への訪問、山陰キャンプへの参加をさせていただきました。

一昨年にも東中国教区での実習をさせていただきましたが、改めて教区の繋がりが、信徒の方々と牧師との繋がりが、「繋がり」の重要性を教えてくださいました。各々の教会が独立しながらも集まって、お互いが支え合うことで成し得ることがあるのだと総社教会への教区の活動を通して学ばせていただきました。

した。また、石井十次をはじめとする多くの社会活動家を輩出した岡山県での実習では、今後の研究を左右する大きな分岐点となりました。あくまで牧師であっても神様の前に一人のキリスト者であり、キリスト者としての生き方が社会福祉という分野に通じるのだと実感し、神学と社会福祉という観点で学びを進めています。

実習において、一つの教会での奉仕ではなく、教区全体の教会での奉仕をさせていただくことができるのが、東中国教区の大らかな特徴の一つではないかと思っています。どの教区でもそうだと思いますが、教会によって求めているもの、特性は異なっています。一つの教会のみの現状を知るのではなく、多くの教会での経験をさせていただくことで、何が各教会で共通して求められているのか、また相違しているのかという、今後のより現実的な現場の課題を知ることが出来ました。また、実習生として毎週の主日礼拝での奉仕を担当させていただくというだけでは、様々な教会の先生の視点から自分自身の説教を聞いていただけということになり、先生方それぞれの異なった視点から指摘をいただける貴重な体験となり、また、同時に励みとなりました。夏期伝道実習での経験を基に、大学院での学びを進めていきたいと思っています。ご指導ご鞭撻のほど宜しくお願致します。また、今後の東中国教区での夏期伝道実習の取り組みが、益々実りあるものとなりますようお祈りいたします。ありがとうございました。

## 夏期伝道実習に参加して



同志社大学大学院神学研究科  
組織神学研究コース一年生

村上寛紀

今回の夏期伝道は、自身の研究テーマである二十世紀のドイツの神学者、デイトトリッヒ・ボンヘッファーに対する理解を

深めることを目的として参加させて頂いた。ボンヘッファーはナチズムへの抵抗運動や神学思想で有名であるが、教会がこの世でなす役割について深い考察を行った神学者でもある。私は神学が実践的に活かされ運用されている教会での働きを実際に体験してみることが、キリスト教の本質的な部分にふれるうえで必要であると、彼の著作を読む中で感じていた。

日本でのキリスト教徒の総数は、日本の総人口の1パーセントにも満たない。キリスト教文化が根付いている欧米諸国と違い、クリスチャンは日本では圧倒的なマイノリティであるといえる。私がこの夏期伝道を通して感じたのは、少数派のクリスチャンの共同体である教会が実には生き生きとして、活気に溢れているということである。教会を訪れている人のほとんどがバイタリティーに溢れていた。

岡山地区の教会を巡って、私は牧師の方々が密接に会員と関わりを持つとする積極的な態度に感銘を受けた。私は、牧師が会員からの話を懇切丁寧に聞き、心から会員の話に耳を傾けることが特別な技能であることを知った。私が会員の話を話すと、自身がいかに普段、共感ではなく批判と疑いの心をもって人と対話をしているのかを再認識させられたのだ。岡山地区の教会では牧師と会員が強い信頼関係で結ばれているように見受けられる。この信頼関係を築き上げていたのは、牧師の方々が信徒の方々に真剣に向かい合うことで生じた、厚い信頼であることは間違いないと断言できる。

キリスト教会は、伝統的なコミュニケーション手段である、お互いに顔を会わせて行う対話を今でも大切に守り抜いている。これは現代のネット社会の潮流に真っ向から反対する試みであるが、少なくとも私の目にはその試みが成功を取っているように思える。教会員の方々は積極的に教会の掃除や、教会行事に参加されていた。会員同士でも頻繁にコミュニケーションがとられているのも何度目にした。キリスト教信仰を守り抜くこととする共同体として、研修に訪れた教会はとても完成されているように感じた。

教会には日本の現代社会が抱えている問題解決の糸口に繋がる要素を持ち合わせていることを、今回の研修において気づかされた。

# シェアハウス「やすらぎの泉」六周年記念コンサートと感謝会

## 和気教会

牧師 延藤好英

先日、七月二十二日、和気町総合福祉センターを会場に「やすらぎの泉六周年記念コンサート」と「感謝会」を行いました。「やすらぎの泉」は、二〇一一年七月に和気町にオープンした母子専用のシェアハウスです。そのいきさつは以下の通りです。

二〇一一年三月十一日に東日本大震災が起こりました。地震の被害、津波の被害、そして福島第一原子力発電所からの放射能被害がありました。放射能は風に乗り、東北だけでなく関東圏にまで及び、各地にホットスポットと呼ばれる放射レベルの高い場所を生み出しました。また空気や食べ物、飲み物による放射能汚染も起こりました。これは現在も続いています。多くの、特に子育て中のお母さんたちが、放射能から子どもたちを守るため、西日本への避難を考えました。岡山県でもそういった避難者を受け入れる民間団体「おいでんせえ岡山」が生まれました。その団体が、避難者を受け入れる家を探しているという情報が、インターネットを通じて流されました。わたしは、その数年前から、和気教会の前の古民家をお借りしていました。それは、家庭で生きづらさを感じ、しばらく一人になって考えたいけど、経済的なゆとりがないという女性たちを利用してもらっていました。震災の少し前から、滞在者がいなくなったので、ここを受け入れの家にしてはどうかと「おいでんせえ岡山」に連絡しました。数日して、その会のメンバーが家を見に来られま

した。そして、「ここは部屋がたくさんあるので、シェアハウスにしましょう」と言われました。「シェアハウスって何？」って感じでしたが、それから様々なネットワークを使って、家の修繕ボランティアが約二週間、朝から夜まで作業に当たってくださいました。延べ約百人の方々が来られました。岡山市、倉敷市、津山市、赤磐市、尾道市などから。また仕事帰りに来られる方、ご自身も避難者で協力してくださいった方など、本当にたくさんの方々が作業に取り組んでくださいました。ご自分の内装業者としての経験を生かしてくださいさる方、電気屋さん、水道工事、畳屋、朝から夜までひたすら雑巾がけをしてくださいった方。みなさんに共通していたのは、「自分の家族を迎えるつもりで」というコンセプトでした。そばで見ている、みなさんが、「今この作業にたずさわれることが嬉しくてたまらない」という思いで来てくださったというのが伝わってきました。その思いは、ボランティアの皆さんが去って、「やすらぎの泉」がオープンした後もずっとこの家にあるぬくもりとして残っています。

そんなシェアハウス「や



シェアハウス「やすらぎの泉」六周年記念 感謝会

すらぎの泉」は、二〇一一年七月一日にオープンして、六年間の間に一七八組の母子を受け入れてきました。毎年七月になると、支援してくださった方々への感謝の思いで感謝会を開いてきました。今回は、自らも避難者である沢知恵さんをお迎えしてコンサートをしようということになりました。「久しく待ちにし」(讚美歌九四番)の心に沁みるアカペラが始まり、最後は「いつくしみ深き」(讚美歌三一二番)で終わるコンサートでした。沢さんご自身の震災体験も交えて語り、歌ってくださいました。当日参加してくださったお母さんたちだけでなく、一般のお客さんも涙を流しながら聴き入っておられました。

コンサートの後は、同じ建物の中の別の部屋を会場にして、感謝祭をしました。お母さんたちの手作りの食事とおやつをいただきながら歓談しました。わたしたち夫婦は、お母さんや子どもたちから一本ずつお花をいただきました。写真は、感謝会の時の集合写真です。

避難する方々、移住した方々が孤立しないように、というのが「やすらぎの泉」の使命だと思っています。これからも、神さまの御心を尋ねながら、シェアハウス「やすらぎの泉」の働きを続けていきたいと願っています。

### 「平和講演会」開催日迫る

講師：金井創牧師（沖縄教区佐敷教会）  
講演テーマ：平和へのキーワード・不屈  
〈辺野古での平和を求める取り組みから〉  
会場：岡山教会

日時：十月二十二日（日）午後二時半  
参加費：無料ですがカンパを募る予定です。  
主催：東中国教区 宣教部 社会委員会

# 総社教会より

## 一緒に喜んでドレヤウ

新しい仲間が与えられました！感謝

### ● 総社教会 ●

代務者 嵐 護

(琴浦教会牧師)

「総社教会は、われわれの聖地だ！」これは、一昨年八月に総社教会で行われた夏期神学生歓迎会でのヨルダン会（倉敷水島教会）の方の熱い思いの第一声でした。そういう思いを込めながら、主日礼拝の前と後には鐘の音が鳴り渡り、小さな花壇では折々の花々が道行く人の目を楽しませてくれています。

その総社教会は、今年のペンテコステに二名の受洗者、一名の転入会者が与えられ、現住陪餐会員が一名から一挙に四名になるという新しいステージに移りました。このお祝いに諸教会から二十二名の方々が駆けつけてくださいました。感謝です。二〇一二年一月、尾熊芳子牧師が八十九歳で天に召され無牧になつた総社教会を、岡山県中部地区伝道協議会は、現住陪餐会員のいない教会ながら総社での宣教の継続が地区の課題だと申し合わせました。そのためには、まず、礼拝の再開に向けて地区が支えていくことを確認し、同年七月に嵐護牧師（琴浦教会）を代務者として教区に推薦するとともに、「総社教会再生プ

ロジェクト・チーム」を立ち上げて支援体制を整えました。

再開への課題は、築五十年になろうとする会堂の補修と、ヒマラヤスギや雑木、棕櫚が繁り、蔭が絡まる庭の整地でした。中部地区ヨルダン会（いわゆる壮年会の連合）の再三の労力奉仕を軸に、児島教会員の雨漏り防止の修繕、二〇一二年八月「鳥取県東部高校生ワークキャンプ」、教区の財務援助、用瀬教会員の機動力を駆使した作業で見違えるように整えられました。加えて、必要な調度品も諸教会・教会員からの献品により揃いました。

そして、二〇一三年三月二〇日に「尾熊芳子牧師追悼祈念・総社教会再出発礼拝」（十七教会六十七名）をもち、次いで同月三十一日のイースター礼拝で一人の転会式を行い、現住陪餐会員一名、代務者一名の態勢が整いました。以後、主日礼拝（午後三時三十分）は、代務者のほか基本的には地区内の教師がローテーションを組んで説教を担当し、各教会の皆さんと共に礼拝に出席することで、平均九十名前後で守られています。折々には、教会を離れていた方や新来会者も出席されるようになりました。

さらに、二〇一三年九月・二〇一四年九月の「教区青年入総社教会再建ワークキャンプ」には、青年とヨルダン会メンバーが会堂・敷地の整備に当たってくださいました（十七教会四十六名・十四教会五十名）。玄関脇の鐘は、その際にヨルダン会の方が藤棚だった鉄材を溶接加工して十字架に仕立て直し、その本体に取り付けたものです。それから、内壁のクロス張り、天井塗装、照明器具の取

替え、エアコン設置、講壇の改装などを行いました。

いずれも皆様方の労力奉仕と献品によってかなえられたもので、感謝にたえません。このように環境が整いましたので、会堂を開放しての定期的な読書会、着物リフォームの集まり、教区の各種会合に使っていただいています。

総社の地に教会が建てられ、み言葉を宣べ伝えて来た歩みを大切にし、新しいメンバーを与えられた感謝と喜びをもって、これからの教会の姿を見出ししていきます。



総社教会 2017年 ペンテコステ

# 教会紹介

## ・玉島教会・

進藤 省一郎

玉島教会は、創立されて今年で一〇九年を迎えます。その中でも特筆されるべきことは、戦中・戦後の教会が苦しかった時代に、河野進牧師（詩人でもあり、「玉島の良寛さん」として慕われています）が、教会だけではなく、玉島の町の幼児保育と社会福祉事業にも力を尽くされて、今でも多くの玉島の人たちに尊敬されていることです。

その後、教会の中ではさまざまなことがありましたが、近年におきましては、牧師の主動によって、不幸な出来事が二つ起こりました。一つは教会の分裂騒動で教会が分かれてしまったことで、二つ目は、新任牧師の身勝手な振る舞いによって教会の衰退が進んで、一時は、ある教会の伝道所になりかけたことです。そうした中で玉島教会の礼拝の出席者は五〇名から三〇名に減っていった、その後、それが一二名まで激減しました。日曜日の朝の礼拝を守るべく全員で神さまに祈っていた時にお迎えしたのが、現在の牧師の倉橋克人先生です。かつて大学で教



玉島教会 礼拝堂にて

鞭を取った経験もあり、賀川豊彦の研究者としてもよく知られている先生です。豊富な学問的な知識ばかりでなく、世事に通じて、私たちの小さな話にも耳を傾けてくださいます。毎週の説教の全文を小冊子の形にして、翌週には全員に配られて、礼拝をお休みしている方々にもお送りしています。耳の弱い者には、毎週、その日の説教の文章を礼拝前に渡してくださって、耳と目で文字を追うように配慮してください。教会標語である「神の家族」を実現するために、現在、全員で努力中であります。

倉橋牧師をお迎えしてから、二人の受洗者が与えられました。礼拝出席者は平均二〇名以上を維持しています。また、教会にとって最大の喜びである受洗志願者が、現在、複数おられて、一〇月の「世界聖餐日」の礼拝式では、新たに二人の洗礼式が行なわれる予定です。クリスマスにも、受洗者が続きます。礼拝出席者三〇名を目標にして、少しずつ、それに近づいている状態に感謝々々であります。

礼拝の演奏は長い間、オルガンの伴奏だけでしたが、現在は一人の大学生と社会人の女性三名と、教員二名で担当していただいております。オルガンとピアノの伴奏に加えて、バイオリンやフルートの演奏もあって、毎週の礼拝が楽しみです。先週の礼拝はオルガンとピアノ・バイオリンの演奏で、まるでコンサートみたいなきときでした。

玉島教会では毎週の礼拝後にコーヒールアワーもっています。礼拝に出席した人たちの八割が参加して、騒がしいくらいの「百円タイム」です。お菓子は手作りのケーキやデザートや、旅行のお土産のおすそ分けなどです。この収益は、災害支援金や団体協力金などに使われます。話題はめいめいが勝手に話し合っ、目的は親睦と交流で、教会の中が元気で、明るくなります。ここに、月一回の「おうどんの会」が入ります（味はなかなかなもの）。

女性の会は、毎月第三金曜日にもたれて、さらに、一年に二回の教会の遠足と家庭集会が行なわれていま



玉島教会 近影

多くが女性たちの力で保たれていて、男たちはおおよぼで参加するだけですけれども、教会の男性たちは、女性たちの働きに対する感謝の気持ちを含めて、年に一回の「男たちが作ったカレーを食べる会」と、クリスマスのお愛餐会では、おでんをふるまいます。

それから、年に数回、教会通信の『晴れるや通信』が発行されて、現在で一九号を数えるまでもになりました。

その他の教会の活動としては、教会学校、聖書の学びと祈りの集い、キリスト教入門セミナーなどがあります。また、今年から教会を会場にして「がん哲学カフェ・イン玉島」も始まり、地道な活動が続いています。

玉島教会には、恵みの丘教会墓地があります。小高い山の上に大きな十字架が立っています。あまりにも立派過ぎて「恥ずかしや」で、イエス様に申し訳なく感ずる次第。墓地の清掃は、専ら男性たちの仕事です。

一人でも多くの地域の人たちとともに礼拝を守るべく、私たちは共に前を見つめて歩んでいます。

「こんにちは」のお部屋

伝道委員会より



中井委員長

みなさん、こんにちは。このたび伝道委員長に選出された中井大介です。現在、伝道委員会の内部には教会強化特別資金運営委員会も設置されています。今期は、申請者による利益相反のケースを極力避けるために二つの委員会の委員長を別に立てました。後者の委員長は八頭教会信徒の岡田悠二さんがご奉仕下さっています。

委員会の活動は、各期総会記録を開いて決算書を読んで頂ければ、ある程度把握することが出来ます。伝道委員会は交換講壇とお祈りカレンダーの発行、二年に一度の伝道協議会を開催する実務委員会という役割を担っています。お祈りカレンダーは、毎週、教区の教会をひとつ取り上げて祈るためのカレンダーです。ぜひ、みなさんの教会でも同じ教区にあって主を宣べ伝える仲間のために祈りを捧げて下さい。

今年度開催する伝道協議会は作家の八木谷涼子さん、キリスト新聞社社長の松谷信司さんを招いてシンポジウム形式のプログラムを実施します。教会に興味をもつ人にとっては教会に足を踏み入れるまでの理想と、その後の現実においてギャップがあります。教会もありのまま過ぎても良くなり、関心がある来訪者の要望（悩み）に耳を傾け、その人に必要な神様との執り成しを試み続ける必要があります。そのためアイデア満載の企画となりますので、万障繰り合わせてご参加下さい。最後に個人的なつぶやきです。伝道委員会は伝道と言いつつ「この道」を伝えるために働いているだろうかと自問しています。今のところは、鳥取県と岡山県にある「礼拝を守る群れ」に対しての宣教強化という視点からの支援を行う実務委員会として活動しています。しかし、つねに私たちは、教会にこれら加わる可能性のある方々、世に住む方々に向けて、神の御言葉の発信者でありつづければなりません。その原点を忘れない伝道委員会であり続けたいと考えています。末筆となりました。みなさんの宣教の上に主の導きを祈ります。

教区事務所より その一

こんにちは、事務局の倉橋啓子です。岡山県西部地区、玉島教会教会員です。主に教務と事務一般を担当しています。皆さんの教会から申請された教団への様々な手続きや教区



倉橋啓子さん

からの書類の発送などの窓口になっていきます。なかなか十分な対応ができていないかもしれませんが、教会の牧師や信徒の皆さんとのコミュニケーションを大切にして、仕事に励んでいます（時には眉間にシワをよせて叱咤激励することもあります。うぞ、ご寛容に）。

教区事務所は倉敷教会のキリスト会館の四階にあります。どうぞお気軽に立ち寄ってください。お茶を召し上がっていただくためのスペースは、用意できますから。次回は、経理担当の、井手幸一郎さんに登場頂きます。

編集後記

今号より最終ページに「こんにちはのお部屋」を創設しました。日頃の教会生活の中で、東中国教区の委員会などの接点が少ない、各地の教会の信徒の方たちに、少しでも教区の働きの（今）が伝わることを願って設けたお部屋です。今号では「伝道委員会」と「教区事務所」からの記事をお願いしました。

このお部屋を通して、聖霊の風が吹き抜けていくことを願っています。ご期待下さい。そして、お祈りをお願いいたします。（G記）